

洋務運動が中途半端で終わったのは、それが清朝の体制維持を前提としたものであったため、日本のように立憲体制の確立までは進展せず、また、欧米からの技術導入も日本のように国家レベルではなく、洋務派官僚個人の私的な軍事力の養成のために利用された側面が強く、清仏戦争や日清戦争の敗北でその限界が露呈された。

■幕末思想を色で識別する

尊王攘夷（橙）

水戸藩・長州藩

*水戸藩は討幕になれず



佐幕開国（緑）

福井藩・会津藩

土佐藩・薩摩藩



討幕攘夷（桃）

長州藩・土佐勤王党



*土佐勤王党は壊滅

*薩摩藩以外は討幕になれず

討幕開国（赤）

長州藩

討幕開国（赤）

薩摩藩

佐幕攘夷（黄緑）

孝明天皇・新選組

2 日本の開国

①列強の接近

年次	できごと
1791	<p>林子平が『海国兵談』でロシアの南下を警告</p> <p>幕府により『海国兵談』は、発禁処分となり、林もまた蟄居に処せられた。</p>
1792	<p>エカチェリーナ2世がラクスマンを派遣</p> <p>根室に來航したラクスマンは、通商を要求、幕府は、長崎へ回るように回答した。老中松平定信は、万が一ラクスマンが長崎に回航した場合には、ロシアとの通商を覚悟していたが、ラクスマンは、そのまま帰国した。また、この時日本人漂流民大黒屋光太夫を送還している。</p>
1798	<p>幕府は、近藤重蔵・最上徳内に択捉島を探查させる</p> <p>近藤重蔵・最上徳内は、択捉島に「大日本恵土呂府」の木柱を建てた。</p>
1799・1	<p>幕府は、松前藩から東蝦夷地を召し上げ、直轄地とする</p>
・7	<p>高田屋嘉兵衛が択捉・国後島間の航路を開拓</p>
1800・4	<p>八王子千人同心100人が蝦夷地に入植</p>
閏5	<p>伊能忠敬が蝦夷地から全国測量開始</p> <p>伊能忠敬から幕府に願い出て許可が下りた。</p>
1802	<p>東蝦夷地を幕府の永久直轄地とし、居住するアイヌ人を和人とする</p> <p>アイヌ人の名前を和風に改称し、和人の風俗を強制した上で、首長を名主に任命するなどの同化政策を開始した。</p>



大黒屋光太夫像
三重県鈴鹿市
(著者撮影)



伊能忠敬像
富岡八幡宮
東京都
江東区
(著者撮影)

年次	できごと
1804	アレクサンドル1世の親書を携えたレザノフが長崎に来航 レザノフ が幕府がラクスマンに与えていた長崎入港許可証の信牌 <small>しんぱい</small> を持参して長崎に入港して通商を求めたが、幕府が拒否した。
1806・1	文化の撫恤令 <small>ぶじゆつ</small> 通商関係にある清やオランダ以外の外国船が日本近海で漂流した際には、食料・燃料を提供する。
・4	文化露寇事件 <small>ろこう</small> （1806年は樺太、1807年は択捉島を襲撃） レザノフの元部下のフヴォストフが樺太や翌年 <small>えとろふ</small> に択捉島を襲撃した。
1807	幕府は、松前藩から西蝦夷地を召し上げ、直轄地とする
1808・4	幕府は、間宮林蔵 <small>まみやりんぞう</small> に樺太を探查させる 天文方 <small>てんもんがた</small> の高橋景保 <small>たかはしかげやす</small> は、樺太が島か否かの論争に決着をつけるために、 間宮林蔵 を派遣した。
・8	フェートン号事件 ナポレオン帝政下のフランスへの服従か敵対かをめぐってイギリスとオランダが対立する中、イギリス軍艦フェートン号がオランダ船を追跡して長崎港に不法侵入する フェートン号事件 が起きた。
1809	樺太を北蝦夷地と改称
1811	ゴローニン事件 国後島でロシア海軍軍人 ゴローニン を捕縛。
1812	ロシアが国後島で高田屋嘉兵衛を捕縛



ゴローニン像
高田屋嘉兵衛像
兵庫県洲本市
(著者撮影)

年次	できごと
1813	<p>高田屋嘉兵衛の尽力でゴローニン事件が解決 ゴローニン事件が解決し、日露間の緊張が緩和された。 尚、この事件が平和的に解決したのは、前年にナポレオン によるロシア遠征が影響していた。</p>
1818	<p>イギリス人ゴルドンが浦賀<small>うらが</small>に来航して通商を要求</p>
1821	<p>幕府は全蝦夷地を松前藩に還付 ゴローニン事件解決で日露間の緊張状態が緩和されたた め、松前藩に全蝦夷地を還付した。</p>
1824	<p>イギリス人が水戸藩領の大津浜<small>おおつはま</small>に上陸 イギリス人が薩摩藩領宝島<small>たからじま</small>に上陸</p>
1825	<p>異国船打払令<small>いこくせんうちはらい</small> 相次ぐイギリス人による不祥事に業を煮やした幕府は、異 国船打払令を出し、清・朝鮮・琉球船は除外し、蘭船も長崎 以外では砲撃対象とした。日本人と異国人の交流機会を断 絶することで、祖法と規定した鎖国体制を再度確認し、キリ スト教の禁制と密貿易の禁止の徹底を図った。</p>
1828	<p>シーボルト事件 シーボルトは、帰国の際国外持ち出し禁止の日本地図を高 橋景保から入手したことが露見し、国外追放。高橋は、投獄 され獄死した。シーボルトは、1859年に再来日。</p>
1837	<p>モリソン号事件 通商交渉と日本人漂流民を送り届けようとしたアメリカ船 モリソン号が浦賀と薩摩の山川<small>やまかわ</small>で砲撃を受けたモリソン号 事件<small>モリソン号</small>が起きた。</p>

年次	できごと
1839	<p>蛮社の獄 <small>ばんしゃごく</small> 尚齒会<small>しょうしかい</small>のメンバーで、モリソン号事件を著書『戊戌夢物語』 <small>ぼじゅつゆめものがたり</small> で批判した高野長英<small>たかのちやうえい</small>と同じく著書『慎機論』<small>しんきろん</small>で批判した渡辺華山<small>わたなべかざん</small>が幕府に処罰された事件を蛮社の獄という。</p>
1840	清でアヘン戦争
1841	<p>水戸藩主徳川齊昭<small>なりあき</small>が藩校弘道館<small>こうどうかん</small>を創設</p> <div style="display: flex; align-items: flex-start;"> <div style="flex: 1;">  <p>弘道館の政庁にある掛軸</p> </div> <div style="flex: 2; padding-left: 10px;"> <p>弘道館初代教授頭取<small>とうどり</small>会沢安<small>あざわやすし</small> (正志齋<small>せいしさい</small>)が著書『新論』<small>しんろん</small>で尊王攘夷論<small>そんのうじょういるん</small>を説いたように、弘道館は、2代藩主徳川光圀<small>みつくに</small>が主導して編纂が開始された『大日本史』<small>だいにほんし</small>の影響を強く受けた水戸学<small>じっぽ</small>の磁場となった。また、尊王攘夷の語の最初の出典は、徳川齊昭の側近藤田東湖<small>ふじたとうこ</small>が弘道館の教育理念を記した『弘道館記』に求めることができ、現存する弘道館の政庁には、齊昭の命で同藩藩医が揮毫した“尊攘”の掛軸が飾られている。</p> </div> </div>
1842	<p>天保の薪水給与令<small>てんぽう しんすい</small> 天保の薪水給与令の内容は、文化の撫恤令と同じであり、食料・燃料などを支給するもの。幕府は、この年から、アヘン戦争の教訓を得て、オランダ商館長からオランダ風説書に加え、別段風説書<small>べつだん</small>を提出させた。</p>
1844	<p>オランダ国王が日本に開国勸告 幕府は、翌年に開国を拒否。</p>

年次	できごと
1846	アメリカ東インド艦隊司令長官ビッドルが浦賀に来航 ビッドル は、通商を要求したが、幕府は拒否。
1848	アメリカが米墨戦争の結果、カルフォルニアを獲得 <u>カリフォルニアを獲得したことは、アメリカが太平洋に進出する契機となった。</u>
1852	長崎のオランダ商館からペリー来航の情報が幕府にもたらされた
1853・6  阿部正弘像 福山城 広島県 福山市 (著者撮影)	<p>アメリカ東インド艦隊司令長官ペリーが浦賀に来航</p> <p> ペリー</p> <p><u>アメリカは、清との貿易船や捕鯨船の寄港地として日本の開国を強く望んだ結果、大統領フィルモアの親書を携えたペリー</u>が通商を要求したが、幕府は、来年返答するという“ぶらかし”（時間稼ぎ）を行ない、一旦退去させた。</p> <p>老中首座^{あべまさひろ}阿部正弘は、<u>事態を朝廷に報告するとともに、外様を含む諸大名に対応を諮問したことがこれまで幕政に関与できなかった朝廷や外様大名などの政治参加を促して後に幕府が崩壊する契機となった。</u>すなわち、朝廷から大政（内政・外交権）を一任されている幕府が決済しなかったことで、幕府にこのまま大政を一任させてよいのかとの疑念を生んだ。</p> <p>しかし、幕府倒壊の全責任を阿部一人に帰結させるのはあまりに酷である。<u>阿部は、幕府だけでは国難を乗り切る人材が不足していることを知っており、名君の誉^{めいくん}高い外様^{ほまれ}雄藩^{ゆうはん}の藩主も含めて^{きよこくいつち}挙国一致で乗り切ろうと考えていた。</u></p>

年次	できごと
<p>・7</p> <p>1854・1</p>  <p>江川英龍像 静岡県 伊豆の国市 (著者撮影)</p>  <p>葦山反射炉 世界遺産 静岡県 伊豆の国市 (著者撮影)</p>	<p>ロシア極東艦隊司令長官プチャーチンが長崎に来航 プチャーチンは、ペリーのようにいきなり江戸の膝元^{ひざもと}に軍艦を寄せるようなことをしないで、幕府の心象^{しんしょう}をよくするため、故意に長崎に来航した。</p> <p>ペリー再来航</p> <p>日米和親条約 (神奈川条約)</p> <p>(1) 下田・箱館の開港 (2) 燃料・食料の補給 (3) 下田に領事駐在を認める (初代駐日総領事ハリスが着任)</p>  <p>ハリス</p> <p>(4) アメリカに最恵国待遇を与える。</p> <p>安政の改革開始</p> <p>老中首座阿部正弘が安政の改革を実施。</p> <p>(1) 武家諸法度を改定し、諸藩に大船建造を解禁。 (2) 品川や浦賀に台場台場(砲台)を建設。 (3) 伊豆葦山の代官江川英龍の建議を容れ、葦山に反射炉^{はんしゃろ}(大砲を製造するための溶鉱炉)を築かせた。 (4) 実力のある親藩・外様を幕政に関与させる。 (5) 軽輩^{けいはい}の幕臣であった勝海舟^{かつかいしゅう}・川路聖謨^{かわじとしあきら}・岩瀬忠震^{いわせただなり}・永井尚志^{ながいなおむね}・大久保一翁^{いちおう}・井上清直^{きよなお}らを登用する。 (6) 長崎で海軍伝習を開始、砲術や武芸を教授する講武所^{こうぶしょ}を創設、翻訳や洋学研究にあたる蕃書調所^{ばんしょしらべしよ}を設置。</p> <p>日本は、アメリカ・イギリス・ロシア・オランダの4か国と和親条約を結んだが、<u>通商関係を認めておらず、薪水給与令と大差がなかった</u>ので、<u>開国したとは言えない</u>。</p>

年次	できごと
<p>・ 7</p> <p>1856</p>	<p>日露和親条約</p> <p>日露和親条約では、国境線の画定も行った。</p> <p>(1) 新たに長崎も開港(米・英に最恵国待遇が発動。蘭には、もともと長崎は開港していた)。</p> <p>(2) 国境線を画定。</p>  <p>樺太は境界を定めず、得撫島以北をロシア領、択捉島以南を日本領とした。 下田で締結。川路聖謨が交渉を担当した。</p> <p>ハリスが第二次アヘン戦争(アロー戦争)を口実に、通商条約の締結を迫る</p> <p>1857年6月に病死した阿部に代わって老中首座となっていた(老中首座の就任は阿部の生前に行われていた)堀田正陸は、勅許を得ようとして朝廷の有力者に金銭をばらまいて幕府支持を取り付けようとしたが、肝心の孝明天皇が攘夷一辺倒であり、幕府の賄賂工作に屈しないように釘を刺していたので、堀田は、勅許を得られないまま江戸へ戻った。そもそも大政を一任されている幕府は、勅許を得る必要がなく、日米和親条約の時も勅許を得ていない。幕府は、当初今回も無勅許で進めようとしていたところ、1857年12月、少なくとも諸大名の了解を得ようとして通商条約の締結がやむを得ない事情を説明した。</p>

年次	できごと								
<p>1858・4</p> <p>・7</p>  <p>井伊直弼像 滋賀県彦根市 (著者撮影)</p>	<p>この時諸侯から猛烈な締結反対の意志が示されず安堵したが、尾張侯（親藩）・仙台侯（外様）・因幡藩（外様）・徳島侯（外様）の有力諸侯から朝廷に奏聞して勅許を得る必要があるとの意見具申があり、幕府は、朝廷ではなく、有力諸侯を納得させる必要から、勅許を取りに行つて墓穴を掘つた。</p> <p>彦根藩主井伊直弼が大老に就任</p> <p>井伊大老が日米修好通商条約調印と次期将軍を決済</p> <p>南紀派の首魁として大老井伊直弼は、一橋派と激しく対立していた。井伊は、最後まで勅許獲得に努力した後、日米修好通商条約調印と次期将軍を決済した。</p> <table border="1" data-bbox="392 852 1129 1277"> <thead> <tr> <th data-bbox="392 852 758 909">一橋派</th> <th data-bbox="758 852 1129 909">南紀派</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="392 909 758 958">次期将軍に一橋慶喜を推す</td> <td data-bbox="758 909 1129 958">次期将軍に徳川家茂を推す</td> </tr> <tr> <td data-bbox="392 958 758 1006">諸侯連合政権</td> <td data-bbox="758 958 1129 1006">譜代（幕府）単独政権</td> </tr> <tr> <td data-bbox="392 1006 758 1277"> 徳川斉昭（親藩・前水戸藩主） 松平春嶽（親藩・福井藩主） 島津斉彬（外様・薩摩藩主） 山内容堂（外様・土佐藩主） 伊達宗城（外様・宇和島藩主） </td> <td data-bbox="758 1006 1129 1277"> 井伊直弼（譜代・彦根藩主） 水野忠央（紀伊藩家老） </td> </tr> </tbody> </table> <p>(1) 下田の閉鎖、箱館のほか、神奈川（横浜に変更）・長崎・兵庫・新潟の開港と江戸・大坂の開市。</p> <p>(2) アヘンの輸入は認めない（日本に有利）。</p> <p>(3) (居留地での) 領事裁判権を認める。</p> <p>(4) 関税自主権の欠如。しかし、従価税方式で輸入税平均20%（日本に有利）。</p> <p>(5) 居留地以外での通商は認めない（日本に有利）。</p>	一橋派	南紀派	次期将軍に一橋慶喜を推す	次期将軍に徳川家茂を推す	諸侯連合政権	譜代（幕府）単独政権	徳川斉昭（親藩・前水戸藩主） 松平春嶽（親藩・福井藩主） 島津斉彬（外様・薩摩藩主） 山内容堂（外様・土佐藩主） 伊達宗城（外様・宇和島藩主）	井伊直弼（譜代・彦根藩主） 水野忠央（紀伊藩家老）
一橋派	南紀派								
次期将軍に一橋慶喜を推す	次期将軍に徳川家茂を推す								
諸侯連合政権	譜代（幕府）単独政権								
徳川斉昭（親藩・前水戸藩主） 松平春嶽（親藩・福井藩主） 島津斉彬（外様・薩摩藩主） 山内容堂（外様・土佐藩主） 伊達宗城（外様・宇和島藩主）	井伊直弼（譜代・彦根藩主） 水野忠央（紀伊藩家老）								

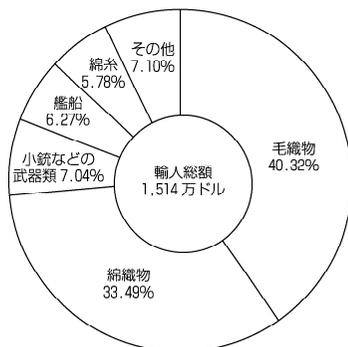
年次	できごと									
<p>⑧ 島津重豪 ⑨ 齊宣 ⑩ 齊興 ⑪ 齊彬</p> <p>久光 ⑫ 忠義</p> <p>*久光は藩主ではなく、 国父。</p>	<p><u>日米修好通商条約は、1855年にイギリスがタイと結んだボ ーリング条約を踏襲したもので、日本は、<u>アメリカ・イギリ ス・ロシア・オランダ・フランス</u>の5か国と修好通商条約を 結んだ（安政の五カ国条約）。</u></p> <p>・8 戊午の密勅降下</p> <p>・9 安政の大獄開始</p> <p>無勅許調印に激怒した孝明天皇は、幕府に対して調印に至 った経緯の説明と幕府に対して天皇の意志（攘夷）を履行す るよう求める勅諭を幕府だけではなく、水戸藩にも降下 した。天皇が幕府の頭ごなしに大名に直接コンタクトをと った（事実上の大政委任の白紙撤回にあたる）ことを重く見 た井伊直弼は、戊午の密勅に関与した勢力の一斉摘発をは かる安政の大獄を開始した。</p> <p>■安政の大獄</p> <p>一橋派諸侯の謹慎処分（島津齊彬は7月に急病死していた）</p> <table border="1" data-bbox="389 1112 845 1277"> <tr> <td>吉田松陰 <small>しょういん</small></td> <td>刑死</td> <td>長州藩士。</td> </tr> <tr> <td>橋本左内 <small>さない</small></td> <td>刑死</td> <td>福井藩士。</td> </tr> <tr> <td>梅田雲浜 <small>うんびん</small></td> <td>獄死</td> <td>おぼま 小浜藩士。</td> </tr> </table> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="408 1290 687 1456">   </div> <div data-bbox="847 1112 1108 1302">   </div> </div> <p>山内容堂像 松平春嶽像 高知県高知市福井県福井市 (著者撮影)</p> <p>吉田松陰像 橋本左内像</p> <div data-bbox="847 1340 976 1537">  </div> <p>梅田雲浜像 山口県萩市・福井県福井 市・小浜市 (著者撮影)</p>	吉田松陰 <small>しょういん</small>	刑死	長州藩士。	橋本左内 <small>さない</small>	刑死	福井藩士。	梅田雲浜 <small>うんびん</small>	獄死	おぼま 小浜藩士。
	吉田松陰 <small>しょういん</small>	刑死	長州藩士。							
橋本左内 <small>さない</small>	刑死	福井藩士。								
梅田雲浜 <small>うんびん</small>	獄死	おぼま 小浜藩士。								

年次	できごと
1860・1	日米修好通商条約批准 正使外国奉行新見正興が米艦ポーハタン号で渡米。この時、 威臨丸 （司令は、木村喜毅・艦長待遇勝海舟座乗）が同行。
・3	桜田門外の変 （重三＝3月3日の変） 水戸藩浪士（脱藩した藩士）17名と薩摩藩士1名の計18名の集団が井伊直弼の 駕籠 を襲撃して暗殺した 桜田門外の変 が起きた。幕府は、 公武合体 路線へ舵を切った。

②貿易の動向

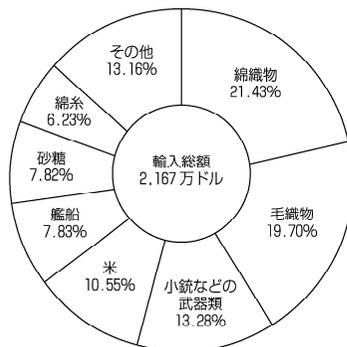
グラフ1

1865年における日本の
輸入総額と主な輸入品の割合



グラフ2

1867年における日本の
輸入総額と主な輸入品の割合



1866年の改税約書の結果、輸入総額が一挙に増加したことがわかる

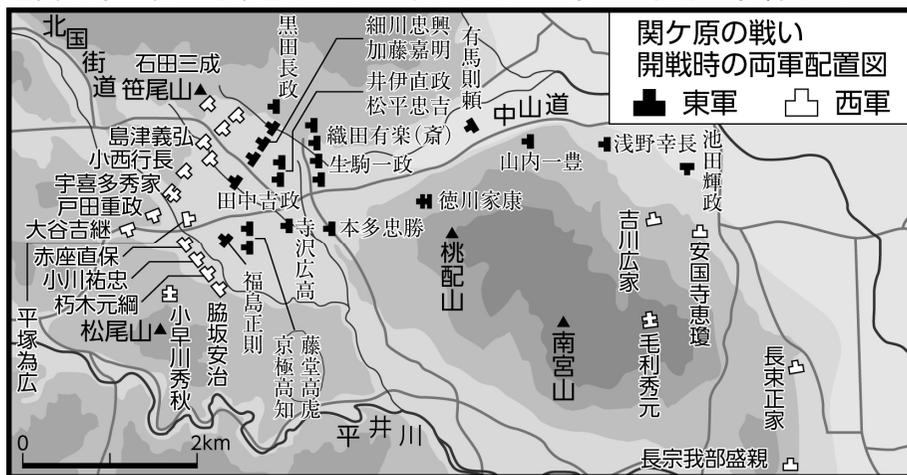
安政の五カ国条約の結果、横浜・長崎・箱館の3港（兵庫港は、孝明天皇の勅許が下りず、新潟港は、大型船が入港できない不備があった）で取引（通商）が開始されると、太平天国の乱で生糸の生産地が荒廃した清に代わって日本産生糸の輸出が急速に拡大した結果、日本は、**輸出超過**となった。輸出品の9割近くは、**生糸・茶・蚕卵紙**、輸入品の7割以上は、**綿織物・毛織物**で占め、次いで幕府や藩が艦船や銃砲などの**武器**を輸入した。取引は、居留地に限定され、外国人商人と日本人の**売込商**の間で銀貨が用

いられた。売込商が江戸の間屋を通さず、外国商人と組んで直接開港場に持ち込んだため、江戸に入る商品が品薄となり、物価が高騰した。そこで幕府は、蠟・呉服・雑穀・水油・生糸などの重要輸出品五品については、必ず江戸の間屋を通すことを命じた**五品江戸廻送令**を出したが、売込商や外国商人の抵抗を受けてほとんど効果がなかった。

日本の取引相手国として**イギリス**がダントツだったのは、開国させたはずのアメリカが1861年から南北戦争に突入したことが大きい。3港の中でも**横浜港**における取引額が他の2港を大きく引き離していた。輸出超過の状態は、1866年に締結された**改税約書**まで続いた。

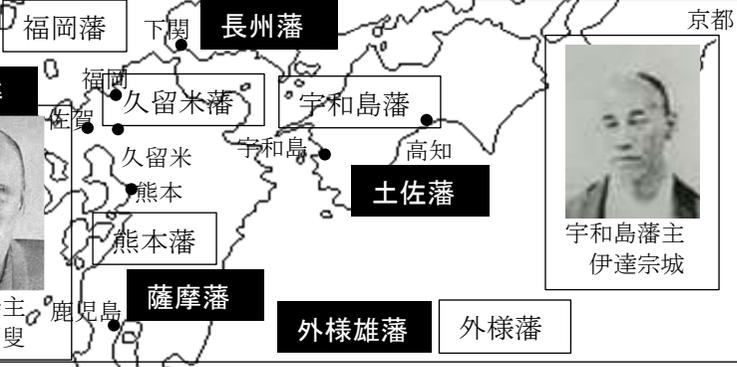
1865年、孝明天皇は、安政の五カ国条約に対して勅許を下したが、開港期日が迫っていた兵庫港の開港勅許を下ろさなかったため、幕府は、兵庫港開港の延期を列国に伝えた。これに不満の列国は、代償として既存の輸入関税率の引き下げ（要するに清並みに輸入関税を引き下げて、日本を自国製品の市場にする目的）を要求してきたので、従来の輸入関税約20%を従量税方式に変更して一律5%に下げる改税約書を結んだ結果、**輸入超過**に転じ、安価なイギリス製綿製品が日本に持ち込まれ、在来の**手紡**や綿織物業が打撃を受けた。

■ 関ヶ原の戦いで東西どちらに味方したかが幕末の行動に影響した



③幕末の政情

					
長州藩主 毛利敬親	長州藩士 桂小五郎	長州藩士 高杉晋作	長州藩士 久坂玄瑞	長州藩士 前原一誠	長州藩士 伊藤博文
					
長州藩士 山県有朋	長州藩士 井上馨	長州藩士 品戯弥二郎	長州藩士 大村益次郎	公家 三条美美	公家 岩倉具視



	
佐賀藩主 鍋島閑叟	宇和島藩主 伊達宗城

					
土佐藩主 山内容堂	土佐藩参政 後藤象二郎	土佐藩士 板垣退助	土佐藩士 坂本龍馬	土佐藩士 中岡慎太郎	土佐藩士 谷干城

					
薩摩藩主 島津斉彬	薩摩藩主実父 島津久光	薩摩藩家老 小松帯刀	家定正室 天璋院篤姫	薩摩藩士 西郷隆盛	薩摩藩士 大久保利通

親藩・譜代藩



庄内藩家老
酒井玄蕃



福井藩主 松平慶永
福井藩士 中根雪江
福井藩士 由利公正
熊本藩士 横井小楠
横井小楠は、熊本藩から招聘され、橋本左内亡き後の慶永の政策ブレーンとなった。

庄内藩

鶴ヶ岡



長岡藩家老
河井継之助

長岡藩

会津藩

長岡

会津

松代

松代藩

水戸藩

水戸



会津藩主 松平容保
会津藩士 飯沼貞吉 (晩年)

飯沼貞吉は、飯盛山集団自決した白虎隊の唯一の生き残り。

福井藩

福井



尾張藩主
徳川慶勝



松代藩主
徳川象山



桑名藩主
松平定敬

桑名藩

尾張

桑名



水戸藩主
徳川斉昭



皇女
和宮

一橋家当主
一橋慶喜

一橋家家臣
渋沢栄一

幕臣
勝海舟

幕臣
榎本武揚

幕臣
山岡鉄舟



幕臣
川路聖謨

幕臣
大鳥圭介

幕臣
大久保一翁

幕臣
小栗忠順

新選組局長
近藤勇

新選組副長
土方歳三

年次	できごと
1861・11	<p>幕府（佐幕開国）岩倉具視（佐幕開国） <small>かずのみや</small> 和宮 降嫁</p> <p>孝明天皇の妹和宮を將軍家茂に降嫁させる話は、井伊大老によって進められていたが、老中安藤信正は、公武合体の実をあげるために孝明天皇の側近となっていた岩倉具視の協力を得て孝明天皇に対して履行する気もないのに、10年以内の攘夷実行の確約をちらつかせて事実上欺き、降嫁を実現させた。後に討幕派に転向する岩倉は、朝廷が幕府に大政を委任している状態を修正して朝廷の意向の下で幕政が行われる体制を目指した。</p> <p>・ 11 長州藩（佐幕開国）「航海延略策」で公武を周旋 <small>ながいうた</small> 長州藩士長井雅楽が「航海延略策」（要するに安政の五カ国条約を破棄するために攘夷する＝破約攘夷は、非現実的で、日本は、将来の攘夷のために今は開国で欧米列強と肩を並べる国力をつけることを考えるべき。よって天皇は、幕府の開国政策を迫認すべきだとの考え）を引っ提げて幕府と朝廷間を周旋した。この考えは、佐久間象山が唱えた「大攘夷論」と酷似しており、極めて正論であったが、同じ長州藩士<small>かつらごころう くさかげんずい</small>桂小五郎や久坂玄瑞らは、幕府だけしか貿易する権利がない以上、通商で強大化した幕府がやがて諸藩に対して圧迫を加えかねないと藩主毛利敬親を説得した結果、永井は失脚、翌年に切腹させられた。</p>
1862・1	<p><small>さかしたもんがい</small> 坂下門外の変</p> <p>和宮降嫁に憤激した水戸浪士が老中安藤信正を襲撃した坂下門外の変が起きた。</p>

年次	できごと
<p>・ 8</p>  <p>岩倉家旧宅 京都府京都市 (著者撮影)</p> <p>1862・4</p>  <p>真木和泉像 水天宮 福岡県 久留米市 (著者撮影)</p>  <p>平野国臣像 西公園 福岡県 福岡市 (著者撮影)</p> <p>・ 5</p> <p>・ 7</p>	<p>岩倉具視蟄居</p> <p>尊攘派公卿三条実美<small>さんじょうさねとみ</small>らから親幕派の“四奸二嬪”の一人として弾劾された岩倉具視が 1867 年 11 月までの約 5 年間、洛北で蟄居生活をおくった。</p> <p>薩摩藩 (佐幕開国)</p> <p>寺田屋事件</p>  <p>現在の寺田屋 残念ながら往時の建物ではない。 京都府京都市 (著者撮影)</p> <p>藩主実父<small>こくふ</small> (国父) 島津久光<small>しまづひさみつ</small>が兵を率いて上洛してきたのは、今は亡き兄斉彬の衣鉢<small>いはつ</small>を継ぐため、朝廷の権威を借りて幕政改革を要求しようとした。しかし、京都在住の薩摩藩士有馬新七<small>ありましんしち</small>らは、久光が率いてきた兵を討幕のための尖兵<small>せんべい</small>に転用しようと計画した。有馬新七の討幕計画には、福岡藩士平野国臣<small>ひらのくにのみ</small>、久留米藩水天宮神官真木和泉<small>まきいずみ</small>、長州藩士久坂玄瑞<small>ぶんごおか</small>、豊後岡藩士小河一敏<small>おごうかずとし</small>らが関与し、討幕の義挙を 4 月 23 日とした。しかし、これを知った久光は、大山綱良<small>おおやまつなよし</small>らに追討を命じ、有馬がいた寺田屋で薩摩藩士同士の同士討ちが展開され、有馬は死亡、二階にいた有馬一派の西郷従道<small>さいごうつぐ</small>、大山巖<small>おおやまいわお</small>、三島通庸<small>みしまみちつね</small>、篠原国幹<small>しのはらくにもと</small>、永山弥一郎<small>ながやまやいちろう</small>らは、帰藩謹慎となった。</p> <p>幕府は、諸藩が外国から艦船を購入することを解禁</p> <p>薩摩藩 (佐幕開国) 幕府 (佐幕開国)</p> <p>文久の改革</p>

年次	できごと
	<p>島津久光は、勅使大原重徳<small>おおはらしげとみ</small>を伴い、江戸へ乗り込み、三事策を要求した。幕府は、ほぼ久光の要求を受け入れ、文久の改革を実施した。</p> <p>■文久の改革</p> <p>(1) 一橋慶喜を將軍後見職<small>せいじそう</small>に、福井藩主松平春嶽を政事総裁職<small>せいじそうざいしやく</small>に、会津藩主松平容保<small>まつだいらかたもり</small>を京都守護職<small>きょうとしゅごしやく</small>に任じた。</p> <p>(2) 参勤交代の緩和(3年1勤、在府100日。妻子の人質制度も廃止)</p> <p>(3) 約1万人の規模での幕府直属軍の創設</p> <p>(4) 蕃書調所<small>ようしょしらべしよ</small>を洋書調所と改称し、幕臣榎本武揚<small>えのもとたけあき</small>らをオランダへ留学させた。</p> <p>・7 長州藩 (尊王攘夷) 永井雅楽が失脚、長州藩は正式に藩論を“尊王攘夷”へ転換</p> <p>・8 薩摩藩 (佐幕開国) <small>なまむぎ</small> 生麦事件 島津久光は、江戸から帰国に船の使用を申請したが、幕府の許可が下りなかったため、陸路を通った矢先、イギリス人を殺傷した生麦事件を起こした。久光自身、佐幕開国の思想を持っていたように、薩摩藩は、藩論として攘夷になったことは一度もない。</p> <p>・8 朝廷は、正式に朝議を攘夷とした</p> <p>・10 三条実美 長州藩 土佐勤王党 (尊王攘夷) 三条実美が攘夷督促のため参府 尊攘派公卿のトップ三条実美が主導して朝議を攘夷でまとめ、さらに、幕府に攘夷を督促するため参府した。</p>

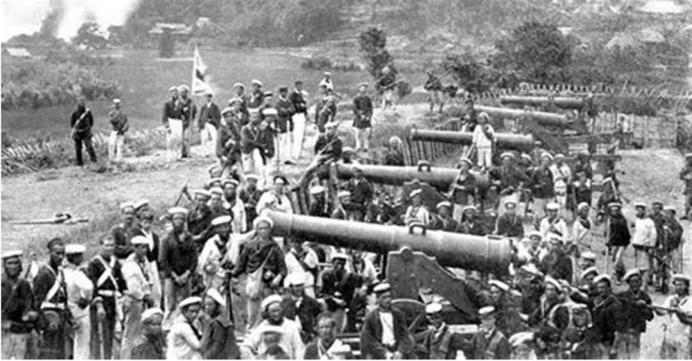
年次	できごと
 <p>高杉晋作像 山口県 下関市 (著者撮影)</p>	<p>・ 12 土佐脱藩坂本龍馬が土佐勤王党を脱して勝海舟の門下となる</p>
	<p>・ 12 長州藩 (尊王攘夷) イギリス公使館焼打ち事件 高杉晋作・久坂玄瑞・伊藤博文・品川弥二郎・赤根武人ら松 下村塾出身者に井上馨も加えた面々が品川御殿山に建設中 のイギリス公使館を焼打ちにした。焼打ち後、久坂は、山県 有朋や土佐脱藩中岡慎太郎らと当時蟄居中であった松代藩 士佐久間象山と面会、佐久間は、吉田松陰に説いた大攘夷論 を久坂らに説いた。</p>
	<p>・ 2 新選組の前身母体壬生浪士組ができる 出羽庄内藩浪士清河八郎が幕府を騙して私設の家茂警護隊 を編制させ、京都に着くや警護隊をそのまま朝廷に奉じる 攘夷軍にすり替えようとした。</p>
	<p>・ 3 孝明天皇 (佐幕攘夷) 幕府 (佐幕開国) 攘夷期日を5月10日とする 1863年3月、家光以来229年ぶりの将軍上洛となった際、 家茂は自ら攘夷期日を5月10日とする旨を約し、諸大名に 布告した。</p>
	<p>・ 5 長州藩 (尊王攘夷) 下関事件 5月10日、長州藩では久坂玄瑞が主導して下関を通過する 外国船を砲撃した(下関事件)。事件直後、長州藩は、伊藤 博文・井上馨ら“長州五傑”をイギリスに留学させた。また、 6月、高杉晋作が主に農民から募兵した奇兵隊を結成した。</p>

年次	できごと
<p>・ 7</p>	<p>薩摩藩（佐幕開国） <small>きつせいせんそう</small> 薩英戦争</p> <p>英国艦隊は、もともと威嚇のために鹿児島湾に来航したが、不用意に陸地に寄せすぎたため、薩摩藩砲台の射撃を受けた。英国艦隊も応戦して鹿児島城下の1割を焼いたが、旗艦の艦長と副長が戦死した。薩英戦争後、互いの実力を求めた両者は、急速に接近した。</p>
<p>・ 8</p>	<p>三条実美 長州藩（討幕攘夷） <small>やまとぎょうこう</small> 大和行幸の詔</p> <p>13日、真木和泉という謀臣を得た三条実美は、孝明天皇を大和にお連れしての攘夷親征、すなわち討幕宣言をしていただく計画を立て、偽勅の「大和行幸の詔」を用意した。</p>
<p>・ 8</p>	<p>三条実美 長州藩（討幕攘夷） VS 孝明天皇（佐幕攘夷） 薩摩藩 会津藩（佐幕開国）</p> <p>八月十八日の政変→<small>しちきょう</small>七卿落ち</p> <p>孝明天皇は、単純に攘夷だけを望んでおり、一向に攘夷しようとはしない幕府に苛立ちを覚えてはいたが、かと言って言う事を聞かない幕府を倒す意志は毛頭なかった。ここに幕末が混迷に陥る要素が隠されていた。5月10日に下関砲撃事件をやったのけた長州藩を支持したのは、攘夷を実行したからで、偽勅まで使って幕府を倒そうとする長州藩を支持することはなかった。天皇の意を汲んだ中川宮、薩摩藩、会津藩が連携して長州藩を京都から追い落とした八月十八日の政変と呼ばれたクーデターが実施された。真木の意見を容れた三条ら七卿は、長州へ落ちることを決めた。</p>

年次	できごと
<p>・ 8</p>  <p>吉村虎太郎像 高知県 高岡郡 (著者撮影)</p>	<p>天誅組 (討幕攘夷) てんちゆうぐみ 天誅組の変</p>  <p>天誅組終焉の地 奈良県東吉野村 (著者撮影)</p> <p>大和行幸の詔に呼応する形で先鋒軍として公卿中山忠光を奉じた天誅組が京を進發し、大和五条で決起したが、幕府軍に包圍され、土佐脱藩吉村虎太郎、三河藩士松本奎堂、岡山藩士藤本鉄石らが戦死して壊滅した。</p>
<p>・ 8</p>  <p>近藤勇像 東京都 板橋区 (著者撮影)</p>	<p>壬生浪士組がこの頃隊名を新選組とする</p>  <p>八木邸 前川邸 京都府京都市 (著者撮影)</p> <p>八月十八日の政変後、隊名を壬生浪士組から新選組とした。後に西本願寺へ移動するまでは、壬生の八木邸と向かいの前川邸を屯所とした。翌9月、松平容保の命を受けた近藤勇一派は、かねてから素行に問題があった筆頭局長芹沢鴨とその一派を肅清した。</p>
<p>・ 9</p> <p>・ 10</p>	<p>山内容堂が土佐勤王党の肅清を開始</p> <p>平野国臣 (討幕攘夷) いくの (但馬) 生野の変 平野国臣らが七卿の一人を奉じて挙兵したが敗れた。</p>

年次	できごと
1864・2	<p>参与会議が瓦解</p> <p>朝議参与 (佐幕開国)</p> <p>八月十八日の政変で討幕勢力が一掃された京都には、朝議参与に任じられたかつての一橋派諸侯が一人残らず結集した。この時朝議参与に任じられたのは、一橋慶喜・松平容保のほか、松平春嶽・山内容堂・伊達宗城、そして島津久光である。特に島津久光は、兄斉彬の衣鉢を継ぐのは俺だと言わんばかりに、国政の主導権を江戸幕府（江戸の幕閣）から京都の参与会議に移してしまおうとの野心を持っていた。しかし、当時の久光が読み誤ったのは、一橋慶喜の心中であった。かつて慶喜は、島津斉彬により14代将軍に推せられたから、当然慶喜をコントロールできると見ていた。しかし、徳川家康の再来と畏怖された慶喜は、島津の傀儡になるつもりはなく、しかも徳川家の血を引く一人として簡単に政治の実権を幕府から雄藩連合政権（朝議参与）に移すことに抵抗を感じない訳ではなかった。慶喜は、参与会議を瓦解させるべく、突如孝明天皇の歡心をかう意図から幕府が進める「横浜鎖港」（天皇は、武力発動ではなく、横浜港を閉鎖することで攘夷の実とするなどこの頃にはかなり態度が軟化していた）を主張して旧一橋派諸侯を動揺させると、中川宮邸での酒宴の席で、久光・慶永・宗城を名指しで“天下の三愚物・大奸物”と罵倒したことで、万事休すとなった。</p> <p>3月、慶喜は、将軍後見職を辞し、新たに朝廷が任命した禁裏御守衛総督兼摂海防禦指揮の職に就いたが、慶喜が参与会議を瓦解させた真の意図が間もなく明らかになった。</p>

年次	できごと
<ul style="list-style-type: none"> ・ 4 ・ 5 ・ 6  <p data-bbox="234 761 364 880">土方歳三像 東京都 日野市 (著者撮影)</p>	<p>容保の弟で桑名藩主松平定敬<small>さだあき</small>が京都所司代に就任</p> <p>神戸海軍操練所開設</p> <p>討幕派浪士団 (討幕攘夷) VS 会津藩 (佐幕開国) 新選組 (佐幕攘夷)</p> <p>池田屋事件<small>いけだや</small></p> <p>長州藩は、桂小五郎を京に潜伏させて 150 名ほどいたとされる諸藩出身の討幕派浪士との連絡を密にしていたが、討幕派浪士の古高俊太郎<small>ふるたか</small>が新選組に捕縛されたので、古高の奪還計画を練るため、池田屋に参集していたところを、新選組に踏み込まれ、討幕派浪士団の首領で熊本藩士宮部鼎蔵<small>みやべていざう</small>以下多数が捕殺された池田屋事件が起きた。</p> <p>近年、新選組が急襲した際、現場に桂もいたが、同志を捨てて逃亡したとの説が浮上している。また、松下村塾出身の吉田稔麿<small>よしだとしまる</small>は、新選組ではなく、会津藩兵に殺害された。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 7 ・ 7  <p data-bbox="244 1479 374 1599">久坂玄瑞像 山口県 萩市 (著者撮影)</p>	<p>佐久間象山が京都で暗殺される</p> <p>長州藩 (討幕攘夷) VS 孝明天皇 (佐幕攘夷) 薩摩藩</p> <p>会津藩 (佐幕開国) 新選組 (佐幕攘夷)</p> <p>禁門の変<small>きんもん</small> (蛤御門の変<small>はまぐりごもん</small>)</p> <p>池田屋事件の前、長州藩では、久坂玄瑞や真木和泉が主導して世子毛利定広<small>せし</small>が毛利父子の復権と入京を求めて上京することが決定されていた。そこで先鋒軍が上洛して容保の洛外追放を掲げたところ、会津藩や薩摩藩と交戦状態となった禁門の変が勃発、敗れた長州藩は、朝敵となった。禁門の変後、京都に幕府とは全く別個の政権としてのいっ (一橋慶喜<small>かい</small>) 会 (松平容保<small>そう</small>) 桑 (松平定敬) 政権を樹立した。</p>

年次	できごと
<p>・7</p>	<p>第一次長州征討</p> <p>7月23日、天皇が幕府に（第一次）長州征討を命じたことで、翌日幕府は、西国21藩に動員令を下した。9月11日、武力征長論者であった西郷隆盛と吉井友実が大坂で幕臣勝海舟と面会、その際勝から幕府には政権担当能力がなく、雄藩を結集すべきだと示唆された。もし長州藩を叩き潰せば、幕府の次の標的が薩摩藩になると見て長州寛典論へ転じた西郷は、参謀格として征長総督徳川慶勝から処分を一任され、武力侵攻を中止した。</p>
<p>・8</p>	<p>四国艦隊下関砲撃事件</p>  <p>四国艦隊に占領された下関砲台</p> <p>前年に起きた下関事件の報復の機会をうかがっていた列強は、8月5日、イギリス・アメリカ・オランダ・フランスからなる四国艦隊を下関に派遣し、117門配備していた長州藩の砲台を完全に破壊した（四国艦隊下関砲撃事件）。</p> <p>列強の圧倒的火力を見た長州藩の大半の藩士は、攘夷の不可を悟った。藩を代表して交渉にあたった高杉晋作は、賠償金および彦島租借案の両方を回避した。</p>

年次	できごと
<p>・ 9</p>	<p>長州藩（佐幕開国）</p>  <p>平尾山荘 福岡県福岡市（著者撮影）</p> <p>長州藩が藩論を佐幕開国に転換し、高杉晋作らのこれまで長州藩を討幕に導いてきた勢力の粛清を図ったので、高杉は、一時福岡藩で勤王女流歌人として知られた野村</p> <p>望東尼の住む平尾山荘に潜伏した。</p> <p>・ 12 三条実美を警護していた中岡慎太郎が西郷隆盛と面会し、薩長連合を打診</p> <p>薩長連合に至る道筋は、坂本龍馬ではなく、この頃三条実美の下にいた中岡慎太郎と中岡と氣脈を通じた福岡藩勤王派の早川養敬や月形洗蔵が先鞭をつけた。</p> <p>・ 12 長州藩（討幕開国）</p> <p>功山寺拳兵</p>  <p>功山寺高杉晋作騎馬像 山口県下関市（著者撮影）</p> <p>下関に戻った高杉晋作は、諸隊に決起を促したが、彼が創設した奇兵隊でさえも当初躊躇したので、伊藤博文など僅か80余名で決起した。高杉の動きに奇兵隊の幹部であった山県有朋が呼応して合流、萩の藩政府を打倒し、藩論を再び討幕に転換した。</p> <p>1865・2 新選組総長山南敬介が脱走し、切腹処分となった</p> <p>・ 4 第二次長州征討</p>

年次	できごと
<p>・9 1866・1</p>  <p>桂小五郎像 京都府 京都市 (著者撮影)</p>  <p>西郷隆盛像 東京都 台東区 (著者撮影)</p>	<p>孝明天皇が幕府に長州再征の勅許を下す</p> <p>長州藩 (討幕開国) 薩摩藩 (島津久光の意見としては討幕を否定、西郷隆盛・大久保利通レベルで討幕を志向していた)</p> <p>薩長連合</p>  <p>坂本龍馬&中岡慎太郎 円山公園 京都府京都市 (著者撮影)</p> <p>1865年5月、中岡慎太郎の尽力により、下関で桂小五郎と西郷隆盛が会うという約束までこぎつけたが、西郷が約束を違えて来なかった。激怒した桂であったが、ここで坂本龍馬が機転を利かせ、桂に対して薩摩藩名義で西洋銃を購入してはどうかと提案した。長州再征が発令され、喉から手が出るほど西洋銃が欲しかった桂が賛同をしたので、坂本が間に入って下関に西洋銃 7,000 挺を陸上することに成功した。禁門の変以来、薩会憎しで固まっていた長州藩士の薩摩藩に対する感情が薩摩名義で銃が手に入ったことで好転したという。</p> <p>薩長連合は、仕切り直しとなり、1月、京都の薩摩藩家老<small>こまつたてわき</small>小松帯刀邸で全六箇条からなる盟約が結ばれたが、軍事同盟ではなく、薩摩藩は、長州藩が負っている逆賊の汚名を晴らすことに尽力することや長州再征が始まった場合、薩摩藩は、征討軍には参加せず、京都・大坂へ出兵するとあった。つまり薩摩藩の軍事行動の対象は、幕府ではなく(島津久光は討幕を許可していないから)、一会桑勢力であった。</p>

年次	できごと
<ul style="list-style-type: none"> ・ 5 ・ 6 ・ 7 	<p>改税約書</p> <p>長州再征開始</p> <p>将軍家茂没</p> <p>1865年4月、幕府が第二次長州征討を布告したのは、長州藩が藩論を再び討幕に転換したことや西洋銃の購入を図っていることを探知したからである。この頃薩摩藩士大久保利通は、長州再征の勅許の阻止に奔走していたが、1865年9月21日、一橋慶喜に出し抜かれ、ついに勅許が下りた。また、同じ頃列強は、9隻の軍艦を兵庫沖に展開させ、四国艦隊下関砲撃事件の講和談判で高杉に示され、結局幕府が支払うこととなった賠償金300万ドルの3分の2を減免する代償として兵庫港の開港を求めているが、これに対しても慶喜は、素早く対応して孝明天皇から安政の五カ国条約の勅許を得て依然として外交大権は、幕府（この場合は幕府の代行政権である一会桑政権）にあることを示した。</p> <p>あくまでも雄藩連合政権を否定する慶喜の態度を見た薩摩藩は、ここで幕府（一会桑政権を含む）を追い詰めるために長州藩との提携が不可避と判断して薩長連合に至る。</p> <p>長州再征は、薩摩藩が参戦を拒絶したことから、参戦拒否や戦線離脱する藩が続出し、しかも長州藩士大村益次郎<small>おおひらますじろう</small>の優れた戦争指導を得て各地で長州軍が優位に展開する中、7月20日に大坂城で将軍家茂が病没したことを機に、9月、幕府代表勝海舟と長州藩代表広沢真臣<small>ひろさわまことみ</small>との間で和議が成立した。尚、一橋慶喜は、当初徳川宗家だけの相続に応じ、将軍就任は固辞したが、12月、結局15代将軍に就任した。</p>
 <p>大村益次郎像 靖国神社 東京都 千代田区 (著者撮影)</p>	

年次	できごと
・ 12	徳川慶喜が 15 代将軍に就任
・ 12	<p>孝明天皇崩御</p> <p>かつては、毒殺説が独り歩きした時代もあった。主犯に仕立てられたのは、薩摩藩士西郷隆盛や大久保利通と連携する岩倉具視だが、この頃依然として島津久光が徳川家も含めた雄藩連合を志向して討幕には反対し、岩倉もまだ幕府を討つことができると本気で考えていなかった。孝明天皇の死が幕府や京都守護職松平容保に大きな動揺を与えたのは、攘夷を督促されて厄介な存在であった反面、その存在が討幕の可能性を全否定してくれていたからである。</p>
1867・ 1	新選組から高台寺党（御陵衛士）が分派
・ 4	高杉晋作病没
・ 5	<p>四侯会議決裂</p> <p>四侯会議前まで島津久光は、自分を三愚物と呼んだ徳川慶喜を快く思っていなかったが、かと言って倒幕（新政権＝雄藩連合政権に徳川家を参加させない）や討幕（武力で潰す）を志向しなかった。家臣の西郷隆盛や大久保利通が慶喜を見限りつつあることを知っていた久光は、最後の機会として、山内容堂、松平春嶽、伊達宗城と協議に臨んだ上で、将軍徳川慶喜との会合に臨んだが、まともや慶喜と対立したため、同月末に開催された薩摩藩重臣会議で長州藩との連携を強化する、すなわち、新政権に徳川家を参加させない倒幕に最終的に同意した。</p>
・ 5	兵庫開港勅許

年次	できごと
<p>・ 5</p>	<p>薩土密約</p> <p>藩と藩との正式な盟約ではなく、土佐藩討幕派板垣退助・谷干城と薩摩藩小松帯刀・西郷隆盛が会合し、討幕の密約を結んだが、藩と藩との正式な盟約ではなく、西郷隆盛にとっては、来る討幕の際、土佐藩を味方につけたいとの思いがあった。</p>
<p>・ 6</p>	<p>薩摩藩（未だ討幕には固まらず）土佐藩（佐幕開国）</p> <p>薩土盟約</p> <p>6月22日、薩摩藩から小松帯刀・西郷隆盛・大久保利通が、土佐藩から後藤象二郎・福岡孝弟が参加し、土佐藩の坂本龍馬と中岡慎太郎の立ち合いの下、薩摩藩が土佐藩が主導する大政奉還路線に協力すること、新政権では上下二院制を実現するなどを内容とする薩土盟約を結んだ。</p> <p>先に板垣らと討幕を私的に約した小松・西郷・大久保らが、大政奉還案に同意したのは、徳川慶喜が大政奉還を受諾する可能性がないと見た上で、後藤象二郎に大政奉還を諦めさせることができると判断したからである。後藤は、本気で大政奉還を進めるつもりであったが、それでは西郷らの同意が得られないと見て、おそらく慶喜は拒絶するはずだと言って盟約に同意させている。この時後藤は、一旦帰国して再上洛する際は万が一討幕になった場合のことを想定して兵を率いてくると約束したが、帰国した際、あくまで倒幕も討幕も否定する容堂の拒絶にあい、結局手ぶらで再上洛した。</p>

年次	できごと
<p>・ 10</p>	<p>後藤が手ぶらで再上洛するのを見た西郷は、土佐藩を外して討幕に突っ切ろうとした。9月7日、後藤に対し、9月20日までに討幕に踏み切ると通告した。その直後に薩土盟約を破棄した。ところが、9月29日、一度は土佐藩を見限った西郷らは、一転して後藤らが進める大政奉還を支持すると通告した。それは、9月8日に薩摩藩・長州藩・安芸藩の3藩が共同出兵を約していたが、ここにきて安芸藩が後藤の進める大政奉還支持に回ったからである。この頃、長州藩は完全に討幕一本に固まっていたが、安芸藩だけではなく、薩摩藩でさえ、京都にいる小松、西郷、大久保が討幕に前めりになっているだけで、国もとの薩摩では、島津久光以下、討幕に反対していた。</p> <p><small>たいせいほうかん</small> 大政奉還</p> <p>焦った西郷らは、10月8日、討幕の正当性を得るために、討幕の密勅工作を開始したが、翌日に長州藩から出兵延期の申し出があり、一旦は、後藤らが進める大政奉還の決着を見ることにした。後藤は、山内容堂を通じて慶喜に大政奉還を献策してもらった結果、10月14日、慶喜が大政奉還を朝廷に願い出た。かつては策士慶喜がどうせ朝廷から徳川家に政権再委任の命が下ると見越して先手を打ったと説明されたが、松平容保が大政再委任の工作を進めようとした際、慶喜は明確に断っている。この頃薩摩藩討幕派の中で対立が生じていた。西郷・大久保の上司であった小松帯刀は、討幕に反対する久光の意向をくんで安芸藩と協力して大政奉還実現に荷担していた。</p>

年次	できごと
 <p>横井小楠像 福井県 福井市 (著者撮影) 熊本藩士でありながら、福井藩主松平春嶽の政治顧問となった。</p>	<p>一方、大政奉還が実現する前、後藤は、福井藩の協力を得るため、坂本龍馬を福井へ派遣していた。この時龍馬は、旧知の横井小楠と会っている。後藤に土佐藩は大政奉還に動くべきだと強く推したのは、坂本龍馬であったが、近年、土佐藩の藩船「夕顔丸」の中で坂本が後藤に「船中八策」を披露した話は嘘であったことが判明した。坂本が大政奉還にこだわったのは、討幕となれば内戦となり、イギリス・フランスの介入を招くと判断していたからである。</p> <p>10月16日、小松帯刀は、後藤・安芸藩家老辻将曹・坂本らと会い、討幕否定を確認した後、17日、西郷・大久保を連れて薩摩に帰国した。これは、13日に薩摩藩に下された討幕の密勅（長州藩には14日に下された）に対する協議を久光と行うためであった。10月21日、朝廷は、大政奉還を受領したため、薩長両藩に討幕を中止する命令を出した。</p>
<p>・ 11</p>  <p>坂本龍馬像 桂浜 高知県 高知市 (著者撮影)</p>	<p>坂本龍馬暗殺</p>  <p>高台寺党石碑 高台寺 京都府京都市 (著者撮影)</p> <p>11月15日、京都近江屋に逗留していた坂本龍馬が訪ねてきた中岡慎太郎と会合していた際、京都見廻組の奇襲を受けて絶命（中岡は翌日死亡）した。当時は新選組の犯行と見られていたが、永井尚志の取調べに対し明確に否定していた。京都見廻組に坂本殺害を指示したのは松平容保だったとの説がある。坂本暗殺から3日後、伊東甲子太郎以下高台寺党が新選組に殲滅された。</p>

年次	できごと
<ul style="list-style-type: none"> ・ 12 ・ 12 	<p>王政復古<small>おうせいふっこ</small>の大号令</p> <p>庄内藩士が薩摩藩江戸藩邸を襲撃</p> <p>薩摩藩 岩倉具視（討幕開国）VS 土佐藩（佐幕開国）</p> <p>土壇場で上司の小松帯刀に大政奉還派に寝返られた西郷隆盛と大久保利通、また兩名と気脈を通じる岩倉具視は、討幕の具体的方策を見いだせず、武力を用いずに徳川家を無力化する方策をたてて実行するしかなく、それが王政復古の大号令であった。一方、慶喜は、三日前の12月6日に松平春嶽から王政復古の大号令と呼ばれるクーデターが計画されていることを知らされたが、動かなかった。</p> <p>12月9日に開催された小御所会議<small>こごしよかいぎ</small>では、会議に招待していない徳川慶喜だけに辞官（内大臣返上）納地（徳川家所領の没収）を迫るというものであった。会議に参加していた山内容堂は、薩摩藩と岩倉具視による謀略に対して王政復古の最大功労者である慶喜の参加を強く求めて抵抗した。しかし、慶喜の辞官納地が決定され、会議に参加していた松平春嶽と徳川慶勝により本人に伝えられた。慶喜は、徴発には乗らず、12日には、幕府兵力を大坂城へ収容、16日には大阪城に6カ国の外交官を引見<small>いんけん</small>して外交権が尚も徳川家にあることを内外に誇示したので、岩倉が腰砕け<small>こしくだ</small>となって慶喜が辞官納地に応じれば慶喜を新政権に迎える線まで後退し、事実上徳川家が新政権を掌握する寸前までに至った。しかし、12月25日、江戸市中の警備についていた譜代藩<small>しょうない</small>の庄内藩士が薩摩藩の江戸藩邸を襲撃したことで事態が一変し、戊辰戦争に至った。</p>

年次	できごと
<p>1868・1</p>	<p>とば ふうし 伏見の戦い</p> <div data-bbox="401 382 611 662" data-label="Image"> </div> <p>錦旗 靖国神社遊就館 東京都千代田区 (著者撮影)</p> <p>庄内藩士が薩摩藩江戸藩邸を襲撃した事件が大坂城に伝わると、激昂する在坂幕兵を抑えられないと判断した慶喜は、「討薩ノ兵」を掲げ、鳥羽・伏見の戦いで戊辰戦争の火蓋が切って落とされた。ところが、薩長軍を基幹とする新政府軍に「錦旗」が掲げられたことを知った尊王家の慶喜は、逆賊になることを恐れ、幕兵を見捨てて大阪湾から開陽丸に乗って江戸へ逃げ帰った。江戸へ戻った慶喜は、抗戦を拒否して寛永寺に謹慎した。</p> <p>・ 3 近藤勇・土方歳三ら旧新選組が勝沼の戦いに敗れる 下総国流山まで落ちてきた際、近藤が自首することを主張し、抗戦を主張する土方らと別れた。自首した近藤は、身柄が露見し、4月25日に斬首され、その1か月の5月30日に江戸内藤町の植木屋で療養していた沖田総司が病没した。</p> <p>・ 4 江戸城無血開城</p> <div data-bbox="230 1267 367 1528" data-label="Image"> </div> <p>勝海舟像 東京都 墨田区 (著者撮影)</p> <div data-bbox="408 1292 618 1532" data-label="Image"> </div> <p>結城素明画 西郷・勝会談</p> <p>予備交渉は、徳川慶喜の使いとして派遣された幕臣山岡鉄舟と西郷隆盛との間で行われた。本交渉は、3月13日と14日に、西郷と勝海舟の間で行われ、予備交渉で確認した点を踏襲する形で進められた結果、4月11日、江戸城が開城された。</p>

年次	できごと
<ul style="list-style-type: none"> ・ 5 ・ 5 ・ 5 ・ 8 	<p>北越戦争 <small>ほくえつ</small> 5月2日、局外中立を主張していた長岡藩<small>ながおか</small>であったが、同方面の新政府軍代表者に拒否されたため、同月6日に結成されていた奥羽越列藩同盟<small>おくうゑつりつぱんどうめい</small>に加盟し、新政府軍と交戦した。この戦いでは、同藩家老河井継之助<small>かわいつぎのすけ</small>が外国から手に入っていたガットリング砲2門を駆使して新政府軍に打撃を与えた。</p> <p>奥羽越列藩同盟締結 新政府が討伐対象とした会津藩と庄内藩の赦免を願い出るべく奥羽諸藩が同盟を結び、後に長岡藩ほかの北越の諸藩も参加して奥羽越列藩同盟となった。</p> <p>上野戦争 江戸城開城に不満な幕臣などからなる彰義隊<small>しょうぎたい</small>が寛永寺に籠城したが、大村益次郎が指揮する新政府軍の攻撃で潰滅。</p> <p>会津戦争 孤立した会津藩は、約1か月にわたり籠城戦を展開。飯盛山<small>いもりやま</small>で集団自決を遂げた少年兵の白虎隊<small>びやくこたい</small>や士族の娘から構成された娘子軍<small>じょうし</small>の悲劇があった。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 10  <p>大鳥圭介像 東京都墨田区 (著者撮影)</p>	<p>箱館戦争 旧幕府艦隊を率いて蝦夷地に渡った榎本武揚<small>おとりけいすけ</small>・大鳥圭介・土方歳三らは、五稜郭<small>ごりょうかく</small>に拠って蝦夷共和国を建国、蝦夷地を、領地を失った徳川家家臣の生活の地にしようと図ったが、新政府が認めるはずもなく、海陸から攻撃を開始、降伏を拒絶した土方歳三が戦死した。</p>

●1864年9月の勝・西郷初めての面会

勝氏へ初めて面会仕り候ところ、実に驚き入り候人物にて、最初は打ち叩くつもりにて差し越し候ところ、とんと頭を下げ申し候。どれだけか智略のあるやら知れぬ塩梅あんばいに見受け申し候。先づ英雄肌合の人にて、佐久間（注1）より事の出来候儀は一層も越し候はん。学問と見識におひては佐久間抜群の事に御座候へども現時の臨み候てはこの勝先生と、ひどくほれ申し候。〔『大西郷全集』〕

（注1）佐久間：佐久間象山

●薩長連合

一 戦（注1）と相成り候時は直様すぐさま二千余の兵を急速差登し在京の兵と合し、浪華へも千程は差置き、京阪両処を相固め候事

一 戦自然も我勝利と相成り候気鋒これあり有之候とき、其節朝廷へ申上きつと屹度これあり尽力の次第有之候との事。

一 万一戦負色に有之候とも一年や半年に決て壊滅致し候と申事これなきことは無之事に付、其間には必尽力の次第屹度有之候との事

一 是なりにて幕兵東帰せしときは屹度朝廷へ申上、直様冤罪（注2）は朝廷より御免に相成候都合に屹度尽力の事

一 兵士をも上国の上、橋会桑（注3）等も今の如き次第にて勿体なくも朝廷を擁し奉り、正義を抗み周旋尽力の道を相遮り候（注2）ときは、終に決戦に及び候外無之との事

一 冤罪も御免の上ハ双方誠心を以て相合し皇国の御為皇威相暉御回復ニ立至り候を目途に誠心を尽し、屹度つかまつるべし尽力「可仕」との事

（注1）戦：第二次長州征討

（注2）長州処分

●近藤勇の辞世

こぐんたす ふしゆう な かえり くんおん おも なみださら なが
孤軍援け絶えて俘囚と作す 願みて君恩を念えば涙更に流る

いっぺん たんちゆう せつ じゆん すいよう せんここ ともがら
一片の丹忠能く節に殉ず 睢陽（注1）は千古是れ吾が輩

なび こんにちま
他に靡きて今日復た何をか言はむ 義を取りて生を捨つるは吾が尊ぶ所

でんこうさんじゃく つるぎ まさ
快く受く電光三尺の剣 只将に一死をもって君恩に報いむ

(注1) 睢陽：8世紀の唐の武将張巡が睢陽城に籠り、叛乱軍の攻囲に抵抗した

1721：公行が解散

1757：清が欧州船の寄港地を廣州1港に限定

1760：公行が復活

1771：公行が再度解散

1782：公行が再復活

1839：林則徐がアヘンの没収・消却を行う

1840：アヘン戦争開始

1842：南京条約

1843：五港通商章程

：虎門寨追加条約

1844：望夏条約

：黄埔条約

1851：太平天国の乱開始

1853：捻軍蜂起開始

1855：ミャオ族の蜂起開始

1856：回民の蜂起開始

1856：第二次アヘン戦争開始

1858：天津条約

1860：北京条約

1864：太平天国滅亡

1865：ヤークーブ＝ベクが東トルキスタンで政権を樹立

1871：イリ事件

1881：イリ条約